

りんどうの花のように

奈良 ノリ子

赤い屋根の西洋館 幼少期

私がこの世に生命を与えられたのは、一九三三年一月九日のことです。

今でこそ家の周囲は大きなビルが林立していますが、私の幼い頃は、我が家の周囲は武蔵野の面影が色濃い原っぱでした。

三歳違いの康晴（やすはる）兄が友達と遊ぶために外出するのを、泣きながら追いかけたのもここでした。

中央線の西荻窪駅から五分ほどのところに住居がありました。住所は東京都杉並区西荻二丁目九一番地でした。

父・照澤敏隆（てるさわとしか）、母・照澤海外枝（てるさわとみえ）はこの地に新居を構えたのです。

赤い屋根瓦の西洋館でした。洋館には図書を整理するガラス戸の書棚が設えてありました。書棚の下にはバンクと称し、事務が執れる棚が縁取られていました。

南に面した壁際には、黒のアップライトのピアノが置かれていました。五歳上の長女惟佐子（いさこ）姉が将来ピアニストになるためのものでした。私は姉の弾くピアノを聞きながら育ってきました。

父はロマンチストだったようです。母は教育熱心な人で、子供の個性を大事に育ててくれました。

南に面した庭は広く、玄関から門までの飛び石は私たちの遊び場でした。

幼少期の私は両親の元でのびのびと過ごしました。

燦々と輝く太陽のもとで庭の手入れをする父のそばで自然に触れていました。そのためか今でも庭仕事が好きです。

小梅桜、ゆっか欄、ぼけの花など、実家の情景がよみがえってきます。

一九三八年五月六日に、弟の章弘（あきひろ）が誕生しました。そのころはお産婆さんによる自宅での出産のため、私は近所の竹林の中にある小さな教会の、Tおばさまのところに預けられることになりました。

不安で落ち着きのない私を楽しませようと、Tおばさまが懸命に気遣ってくださいました。とを覚えています。

半月ほどで帰宅を許された私は、スキップしながら我が家に戻りました。かわいい赤ちゃんと会えたこと、お姉さんになれたこと、本当にうれしかったです。

赤い屋根の洋館には、弟を加えて六人の家族が、神様の祝福の中に暮らすことになりました。

りんどうとの出会い
疎開地にて

一九四五年、太平洋戦争は激しくなりました。東京は危険な状態になりました。

男性や働き盛りの人を残し、女子供は田舎に疎開を余儀なくされました。私は母と弟と一緒に、群馬県の草津に縁故疎開しました。草津国民学校に転校したその日、谷間にある炭焼き小屋から炭俵を背負い子に付けて、リレーで運ぶ作業を経験しました。地元の子供は二俵を軽々と運ぶのに、私は一俵を運ぶのもやっとでした。

私にとって生涯忘れることのできない経験は、野辺に咲くりんどうの花との出会いでした。終戦の玉音放送を聞いてまもなく、国語の時間に俳句について学ぶ折がありました。受け持ちの宮脇晴枝先生が、俳句の基本的な指導をしてくださいました。

一七文字でできており、上五、中七、下五とよみ、季語を一つ入れます。有名な俳人の句も紹介されました。

『山路来て何やらゆかしすみれ草』 芭蕉

『閑さや岩にしみ入る蟬の声』 芭蕉

「さあ、皆さんも外に出て一句つくってみましょう」
の声で学級全員が校門外の野原に飛び出しました。

秋の野に歩みを進めた私の目に映ったもの、それは草陰にひっそりと咲いている紫のりんどうの花でした。凜として気品のある姿、どう表現したらよいか、その瞬間、わいてくるものがありました。

『りんどうの 香りも高き 草の陰』

『戦いに 負けて寂しき 秋の風』

私はその時以来、俳句を趣味として楽しむようになりました。

俳句の手ほどきをしてくださった宮脇先生は、結婚されて塚田先生となられました。俳句への原点が塚田先生のご指導にあるので、いつか感謝の気持ちを伝えたいと常々思っていました。

後年、友人から『歌人たちの遺産』をいただきました。本の中に、疎開地から帰るとき、お別れ会でクラスの皆さんと歌った『朧月夜』を発見。塚田先生への感謝の気持ちを込めて、この本に私の俳句を添えて贈呈いたしました。

『この度は思いもかけず旧姓照澤ノリ子さんよりのお便りと池田勇人様の書籍をお送りいただき、本当にありがとうございます。心の温まる思いに浸ることができました。ノリ子さんの俳句『雪除けて 切株にいる 小鳥かな』は、情景が映し出されてよい句。六十余年の歳月を過ぎて、よき教え子を持って幸いと思っております』

思春期の私は天真爛漫に育っていました。

中等学校の受験期を迎えたのは、太平洋戦争の終戦の翌年、一九四六年のことです。

「ノリ子に合っているからJ学院がいい」

の姉の一言で、プロテスタントのミッションスクールに入学しました。母の妹たちがみなJ学院出身だったので、叔母たちを通して、姉はなんとなくJ学院を理解していたのかもしれない。

もともと麹町に校舎がありましたが、ご多分に漏れず戦災で校舎を焼失していました。姉妹校の東京女子大学の校舎の一隅をお借りしていた頃のことです。

入学と同時に私の心は、聖書・讚美歌・お祈りに、瞬く間に魅了されていきました。

そんなときに受け持たれたのでしよう。女子大生が使用しない放課後、キャンパスの一隅で聖書研究会を開いてくださいました。自由参加でしたが、私は欠かさず参加しました。

その会で、イエス様が私たちの罪のために十字架にかかり、血を流されたことを知るようになりました。イエス様が私を招いてくださっていることを感じ始めました。

父が重病で入院したことを機に、洗礼を受けたと思うようになりました。

父を見舞いに行く坂道の途中の家の垣根に、黄色いばらが咲いていました。私は思わず讚美歌を口ずさみました。

『主よこころみ うくるおり

いのりたまえ わがために

こころおそれ まどうときも

あいのみかお むけたまえ』 (讚美歌三一六)

S先生に導かれて、私も永福町教会に通っていました。やがて、それまでお世話になっていたS先生が退職され、永福町教会の牧師夫人になりました。

献堂式の礼拝の中で、私は洗礼を受けました。一九四八年九月二六日、十五歳のことで

受洗記念にS先生からいただいた言葉は、『この人たちは皆、信仰をいだいて死にました』(ヘブライ人への手紙二一章二三節)

この聖句は、私が生涯、信仰生活を貫き通せるようにとの祈りを込められた贈り物だと思えます。

フリージアの香り 結婚

一九五一年、我が家の近くに教会が建ちました。日本基督教団・西荻教会でした。バプテスト系の教会でした。一階が西荻幼稚園の園舎、二階は牧師館を含むマンションと礼拝堂が併設されておりました。永福町教会の会員であった私は、高校生として、家に近いところの教会への転入会を希望しました。

ある日、夕拝に出席すると、一人の青年が証をなさいました。礼拝の中で次の讃美歌を歌いました。

『日暮れて 四方はくらく わがたまは いとさびし

よるべなき 身のたよる 主よ、ともに宿りませ』 (讃美歌三九番)

青年の証は余にもこの讃美歌の歌詞にぴったりで、思わず引き込まれている自分に気づきました。青年の証は、ご自分の体験だったのです。

青年はT大学YMCAのキャンプに参加しているときに、ある悩みを抱えていました。プログラムが終わった夜に、グループを離れ、一人あてどなく暗闇を歩いていました。

青年の悩みは、卒業後の進路について、行く先を決めることに関わっていました。山道を登り詰めた頃、青年の目の前に、明かりに照らされた教会の十字架だけがくっきりと浮

かび上がってききました。

このとき、青年の心の悩みは消え去り、主が共にいてくださりここまで導いてくださったことを、感謝する思いに満たされていたのです。青年は若い人々を教会へ導く伝道の業に献身したいと決心したのです。この青年の証は、私の心の底に深く刻まれました。

私は高校を卒業したら幼稚園の先生になりたいと、保育科に入学しました。二年間の幼児教育の学びを終え、西荻教会付属西荻幼稚園に就職することになりました。

N青年は高校生クラスの先生でもあり、教会学校や週報印刷の手伝いなど、奉仕を共にするようになりました。彼は教会の帰りに私の家に立ち寄ることもありました。

幼稚園の就職が内定した頃、牧師先生から、「ノリ子さん、あなたは将来のことをどのように考えていますか」と尋ねられました。

「Nさんの夕拝での証を感銘深く伺いました。教会での奉仕を通して親しくさせていただいております。将来共に歩みたいとお話をいただいております。主のみこころが示されますように祈っております」

では幼稚園の就職前に、ということとで両家との話し合いも進み、西荻教会で奈良昴（ならたかし）さんと婚約し、数年後に結婚しました。職場や教会の方、恩師や級友に祝ってもらいました。ブーケは黄色いフリージアでした。

神様からの授かり物 赤ちゃん誕生

結婚と共に夫の山梨県甲府市のYMCA赴任が決まりました。住居はY会館の二階でした。公私ともに慌ただしい生活が始まりました。まず土地に慣れることです。

二年目に私はYの会員のお子さんを集め、幼児の「つぼみグループ」を始めました。近隣に山梨英和幼稚園がありました。三歳児保育はしていませんでした。Yの会員の方も熱心に手伝ってくださり、つぼみグループは成長しました。今でも続いているそうです。

暫くして夫の東京Yの経堂ブランチへの転勤が決まりました。

西荻教会の片谷牧師より、高井戸の角笛幼稚園の主任が退職されるので後任にどうかとの連絡がありました。お受けすることになりました。

住居は勤務先の経堂ブランチの近くのアパートでした。

角笛幼稚園にも慣れ、送迎バスにも乗車するローテーションにも加わっていました。

秋の運動会の準備の準備をしているとき、気分が悪くなりました。妊娠していることがわかりました。

結婚して六年目でした。神様のなさることは折りにかなってすばらしいことを経験しました。クリスマスや卒園式を終え、角笛幼稚園を退職しました。

将来に備えて申し込んでいた住宅供給公社町田市があたり、出産を待ちました。

一九六三年六月、長男旬晃（みつあき）が町田市のI産婦人科で誕生しました。私の父が、ヨハネ福音書一章の、キリストの光を指し示す、ヨハネに因んでつけてくれました。神様から授かった生命を感謝する思いがあふれ、涙が流れました。主治医に「どこか痛むのか」と聞かれたほどです。

夫もどんなにか赤ちゃんを待ち望んでいたことでしょう。

長男と一緒に退院しました。出産前に育児日記を買い置いていたのですが、その一ページ目に「ついに我が子誕生。感謝、がんばるぞ、乾杯」と書かれていました。

旬晃は夏の誕生なので、薄着ですくすく育ちました。

一九六五年七月、次男を授かりました。

父が亘祐（のぶすけ）と名付けてくれました。あまねく人々に述べ伝えるという意味だそうです。

亘祐は産院にいる間に発熱があり、国立小児病院に移されました。アイソレーションに入れられました。一ヶ月後に退院することができました。

夏衣 授かりし吾子 神のもの 奈良 竜胆

今、よみがえる言葉 点訳 四〇代

我が家の二人の息子たちの教育面では、幼稚園から中学生までは学校への協力を密にし、PTA活動にも参加してきました。息子たちが高校に進学した頃には、私自身の新たなる自分探しに切り替えるようにしました。

東京都杉並区に住んでおりましたが、ある日のこと、区の広報誌で成人学級を公民館で行っていることを知りました。

その中から、点字教室の研修を選びました。一九八〇年秋のことです。

講師は日本盲人職能開発センター所長の松井新二郎先生でした。先生は中途失明者です。点字の技術面はもちろんのこと、講座を通してご自分の体験を語られ、いつの間にか引き込まれていました。

「目の不自由な人にとって、指先は目である。ボランティアの心は憐れみではなく、同じ人間の一人がたまたま目が不自由なので、目の代わりになるだけである」

というようなことをよくおっしゃっていました。私が知らなかった世界へと視野が開かれ、光が差し込んでくるような思いでした。

点字教室を卒業したからといって、すぐに点訳ができるわけではありません。卒業後こ

そさらに技術的訓練が必要とされました。

点字講座の卒業生のために杉並三木会というのがありました。私も三木会に入会し、毎月第三木曜日の夜を研修日としました。「継続は力なり」。松井先生が繰り返しておっしゃった言葉です。

盲人職能開発センターでは、目の不自由な方のために、料理教室をはじめ、献立や作り方の手順などの点訳を依頼されるようになりました。

外国の視覚障害者の方々を日本に招き、点字の国際コンテストなどを開いたりしました。ホームステイのお客様のために自分の家を開放し、交流を持つボランティアをしました。我が家にはシンガポールの方のチイサイさんが一泊され、翌日の国際大会に参加されました。この方はクリスチャンで、後に結婚されました。

点訳五年目になると、点字板からタイプライターに変わり、著書の点訳ができるようになります。点訳本を選べる楽しみも増えました。

松戸にいた頃、松戸教会の石井錦一先生と出会いました。先生の『祈れない日のために』の点訳を贈呈いたしました。先生は当時、信徒の友の編集長で、視覚障害者の所在もご存じでした。先生の手でその点訳本は贈呈されました。

主は小さき者を用いてくださいました。

生命は神からのもの 老年期

二〇〇四年九月、突然、かつて経験したことのない頭痛に襲われました。

脳動脈瘤破裂。くも膜下出血という病になりました。三人に一人しか生存しないといわれている病です。七一歳、老年期に入ったときでした。

千葉県救急医療センターでカテーテルによる手術を受け、二ヶ月間の治療後、リハビリテーションを受けられる病院に転院しました。

夫はその間、私のために心身共に労し、仕事の行き帰りに立ち寄り、細やかに気遣ってくれました。

後に入院時の私の手術に関わる書類を見ました。重病なだけに、かなり厳しい検査ごとの誓約書のサインを見て、その時の夫の心情を察することができました。

手術を執刀されたドクターはじめ主治医を含め、ナース職員方のお世話によって完治したので。感謝の他ありません。

私は新しい生命をいただいたのです。なんのために生かされたのでしょうか。問い続けるなかで、私のような者でも神様は必要とされているからだ、と思うようになりました。

後に、もと入院患者としての体験を将来医者になる医大生に語ってほしいとのご依頼に

答えて、体験学習の講師として参加した経験もありました。

私をいたわって結婚式の誓約を最後まで守り続けてくれた夫は、二〇〇七年二月二〇日に、肺線維症という肺の萎縮による病に胃がんの発症も伴い、八ヶ月の闘病の後に、私と二人の息子を残して天に帰っていきました。

夫は主治医から告知を受けたとき、素直に微笑みを持って受け入れました。私も同伴していましたが、素直に受け入れることができませんでした。夫が悲しみの中にも神様が与えたものを受け入れ、信仰の道を歩み抜いたことは、私ども家族にとつて宝となりました。夫の生涯の証を通して、生命は神様からいただいたものであることを再確認いたしました。

二〇一八年十一月、私は八五歳になります。若いときにはなかった変化を心身共に感じるようになりました。生かされている間は取捨選択しながら、教会生活、奉仕、趣味の俳句などを続けていきたいと考えています。

夫を送った悲しみはやがて希望へと変えられていきます。再び会える日まで。

いのちとは かみからのもの 黄水仙 奈良 竜胆

愛唱聖句

*イザヤ書四〇章八節

草は枯れ、花はしぼむが、わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。

*ヨハネ福音書二章一六節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

*第二テモテ四章五節

み言葉を宣べ伝えなさい。折りが良くても悪くても。

愛唱讃美歌

*二編讃美歌二六番

ちいさなごに花を入れ

*讃美歌三〇番

あさかぜ　しずかにふきて